無意識

千葉胤成

一

凡そ吾人の精神生活は無意識より出でゝ無意識に入る。茲に無意識は意識無きの意にあらず、一切の思量分別を超越せる絶對の意識に名けたる假名に外ならぬ。然るに無意識の語は從來種々の意に用ゐられ、時として副意識潜在意識の語を以て呼ばれ、或は是等の間に何等かの差違を認め互に相對立せしめらるゝこともある。何れにするも廣義の無意識は通例の意味に於ける意識を以て考察すべからざる精神生活を意味する點に於て一致すと云ふことが出來る。吾人はカルスと共にあらゆる意識は無意識より開展するを以て意識的精神生活を理解する關鍵は實に無意識にありと信ずるものである。

元來無意識又は無意識的てふ概念を始めて心理學の領域に齎したのは、後に述ぶるが如くライプニッツである。爾來哲學的又は心理學的に此に關し種々の見解を立

せる者續出したのであるが、殊に近時墺米等の諸國にありて變態又は通俗心理學に於て不明なる又は困難なる精神現象を考究するに當り頻りに此語をかり來りて證明の具となし、無意識の論は寧ろ是等諸國に於て顯著なるの觀を呈するに至つて居る。無意識の語は勿論 'Unbewusste' 'unconscious' の譯であるが、米國等にありては寧ろ通例 'subconscious' の語用ゐられ副意識又は潛在意識を意味することが多い。又時としては 'subliminal' 又は 'marginal' てふ語にて呼ばるゝことあり、稀に 'co-conscious' の語を用ゆることもある。是等の語は夫々特殊の意味を有することあるも、多くは混用せられ一々明確なる定義を與ふることは甚だ困難である。其故に吾人は茲には語義に關し考察することなく、先づ無意識なる概念の發達を通覽し、次に之に關する論爭の梗概を略叙し、最後に吾人の見解の要領を述べやうと思ふのである。(一)

二

無意識てふ概念を始めて心理學の領域に齎したのは前述の如くライブニッツである。(二) 彼は個體の獨立を唱へながらなほ其結合を認め、其本體を單子(monade)に歸したのである。而かも是等本體は各窓を有せず、從つて其間に何等の作用なかるべき筈

なるに、實際は皆同一生活を營み相互影響する所あるが如き觀を呈して居る。之を豫定調和(harmonie préétablie)と云ふのである。然るに此豫定調和の根元は神に存する。よりて神をば原始單子と稱す。卽各單子は原始單子たる神によりて豫定せらるゝを以て、全體は同一目的に向ひ存すと見なければならぬ。されど個々の作用より見るときは、一定の法則に從ひ必然的たるを免れぬ。但し此單子は全世界を表象するも全世界を意識するものにあらず、而して單子の完全なるに從ひ無意識作用は減ずるものである。故に無意識の表象は極小の知覺を有し、是卽極小知覺(petitesperceptions)である。こは吾人の意識に上らずと雖も、そが結合するときは意識的となり、吾人の知覺或は表象を生ずる。されど此與へられたる度の意識と無意識との間には任意數の中間段階介在するを以て所謂極小知覺も唯割合に無意識なるに過ぎぬ。曰く『海波は澎湃の音をなすも滴々たる淋瀝は吾人の耳に達せぬ。而かも吾人は此際音覺を有しないのではない。何となれば波浪の響もなほ點滴の同時的噪音より成るからである』と。かくて意識的心的作用も畢竟無意識的の結果であると思惟したのである。ライプニッツの理性論に反對したのはロックの經驗論であるが、彼がロックの認識論を批評せる際、人類に生得なる無意識的內容の存在を主張して居る。ロック

によれば、吾人の心には本有觀念(innate idea)なるものなく、なほ白紙に比すべきである。故に觀念は外界より來なければならず、卽經驗より來るのである。然るに經驗には二つあり、感性(sensation)と悟性(reflection)卽是である。前者は外感(outer sense)より起り後者は內感(inner sense)より生ずる。ライプニッは之に對して云つて居る。ロックが吾人の認識は悟性と感性との二つよりなるとせるは正當であるが、本有觀念なしとせるは誤つて居る。吾人の觀念は現實的に本有ならざるも、是等も畢竟本來具存的(virtuelle)である。卽現在意識されざるも、本來心に固有にして經驗により次第に意識的となるものである。かくて表象に二ありとなし、單なる表象を知覺(perception)と名け、其意識的となりしものを明覺(apperception)と稱し、明覺によりて無意識的內容が始めて意識的に結合せらるとしたのである。

此無意識的心的內容の論は、ライプニッ以來種々の方面に波及せるが、ヘルバルトに至り一發展をなしたのである。卽ヘルバルトにありては、意識の閾下にある如き表象を以て無意識と呼んで居る。彼によれば、意識は精神が他の實體に對する關係の總和であるが、對象に對する關係從つて其に應ずる表象は悉く同じ强さを有するものにあらず、或者は他を驅逐し緊張せしめ不明ならしめ又平衡の關係にあらしむ

ることがある。されど壓服せられたる表象は全然消失せるものにあらずして、意識の閾に侍し適當なる時再び生起し親近なる表象と結合し協力して躍出するものである。而して此表象の運動は力學の法則に從つて考察することが出來ると思惟して居る。是實に彼が數學を心理學に適用せんと試みたる所以である。扨て意識の閾に侍して壓服され不明瞭なる域に働きつゝある表象は、吾人之を半ば意識するものにして感情卽是である。然るに此感情はそが躍出せんとする努力の結果の大なるか小なるかに從ひ夫々の欲望として現はれ、其欲望が結果の希望を有するときは意志となる。其故に意志も特別の精神能力にあらずして、主表象の他に對する關係に基くに過ぎぬ。而して閾下にある表象と雖も、實際の表象に行はるゝ以外の法則に從ふものにあらずとしたのである。

無意識の概念をして全然思辯的ならしめたのはシェリングである。而して其自然哲學の先驅をなせるはカルスなりと稱せられて居るが、此兩者は互に相影響する所があつたやうに思はれる。カルスによれば無意識と意識とは吾人內部の神的或は無意識的理念より出でたる光線たり、而して無意識的光輝は無盡藏の泉にして之よりして常に豐富なる新意識生起するのである。又靈は自然の無意識的支配に近き

而して之によりて生長するものである。而してあらゆる意識はそが美的自然性に到達せんがためには更に無意識にならなければならぬ。其故に何れにありても無意識は最初にして最後、意識は單に其手段たるに過ぎぬ。凡て病める惡しき目的なき痛ましき及缺けたるものは無意識と何等の關係なく、其等は意識と共に始めて生起するものである。故に無意識には疑、動搖、疲勞、學習又は病の存するなくそは實に確實、賢明及美、容易及疲れなき直接性を以て働くものである。されど彼はなほシェリングと共に意識は自由の光に於て働き、無意識は沈默せる必然的法則に從ふものと思惟して居る。

更にシェリングに至りては、其思辯的色彩をして益々濃厚ならしめて居る。彼の哲學はフヒテの知識學に出で更に一歩を進めたるものであるが、自然界は無意識的靈智の作用を經て意識的靈智の作用に達せんとする過程なりと見、從つて自然に、も一の目的ありとし、之を生活生命に歸したのである。自然は偶然の連結をなすものにあらず、一大有機體を形成するものにして、各部分は低級の力より高級の力に移る段階に外ならず結局皆生活並に意識を生ずるがために存するものである。されど自然は生活てふ目的あれど、そは自然として客觀的である、此客觀的自然が自我の中

に現はるゝときは、眞に茲に調和を得べきである。而してそは自然を美術的に直觀することにより、卽天才の働によりて藝術を作るときは、其藝術は天才の意識より生ぜしものにして、目的を供ふるも同時に無意識的自然に等しく、茲に意識と無意識との完全なる調和を得る。故に天才は靈智にして自然である。卽天才の作れる藝術は有限中に無限を表はすものと云ふことが出來るとして居る。

上述の傾向に對し英國にありてはジョン・スチュワルト・ミル、ベーン、スペンサー等獨國にありてはロッツェの特に之に反對するもの續出せるも、他面に於て哲學的心理學的に無意識の論をなすもの亦少くない。而して從來に比し著しく心理學的特色を帶ぶるに至れるが、其劈頭にあるものをフェヒネルとする。フェヒネルによれば精神的と物質的との差違は存せず、そは神性の內面と外面との差に過ぎぬ。卽そは現象的にして觀者の立脚地の違に基き本質的差異存せず、譬へば同一球の凸凹兩面にも比すべく、兩者の關係を研究するもの卽精神物理學である。かくて其所謂精神物理的根本法則の結果、一定の精神物理的活動の意識的相關關係の消失する限界に到達し、茲に無意識的感覺及表象の假定を立し、此領域にありてはなほ精神物理的活動繼續すとしたのである。卽彼によれば或刺戟により喚起され而かも意識を動かすに足ら

ざる如き感覺は無意識たり、而して無意識には種々の段階あることを唱へて居る。(四)彼は又ライプニッツの如く意識は無意識に先行し無意識は意識より生成すと思惟し、此考は後ヴントを影響して居るやうである。

三

近世心理學者中無意識に特に重大なる意義を與へ、之に關し深き研究をなせるものはフォルトラーゲである。彼によれば意識、空間、時間、感覺及感情並に又力、物理的不可量物及物質の根柢をなすものは實に衝動である。而かもそは禁止されざる限り意識なき狀態にあり、禁止さるゝや始めてそは自己觀察に現はれ、卽意識さるゝに至る。而して自己保存の根本的基礎衝動は其固有の深處に於て無意識に留らんとする努力を有するのであるが、そが分れて副次的衝動となるや、玆に意識的となるのである。されど意識的及無意識的狀態は決して漸次的差違にあるにあらず、意識は寧ろ無意識的狀態に於て全く有せざる新しき表象內容の性質を有する。是れ實にライプニッツ等と異なりフォルトラーゲに至り始めて明瞭になりし考である。然るに彼の無意識は凡そ次の四つの異なれる概念を含んで居る。卽一には絕對的なる無意識

的能力、二は表象すべき又は表象すべからざる表象內容群、三には精神內にあり而かも未だ注意の焦點に來らざる表象內容(彼は之をunbewusste Sensation=unbewusste Empfindungen u. (Gefühle と云つて居る)四には嘗て意識的たり而して再び無意識となれる潛勢的而かも回想し得べき表象內容是である。フォルトラーゲの無意識論の缺點は是等多くの概念を明瞭にせず互に混用せる點にあるが、之を根柢として精神生活を說明せんとせる努力は甚だ多とすべきものがある。

フォルトラーゲに次ぎ無意識的能力を高調せるものはアイ・イー・チ・フヒテである。彼によれば意識は靈に對し副次的現象其屬性又は偶然的のものにして獨立的實體的のものでない。そは不生產的にして何等新しきもの他のもの又は高きものを齎さず、唯內部の狀態として輝き精神內に存する實際の狀態及變化の擦過的光輝に過ぎぬ。而して意識或は自我を精神と同一視し實存的のものとなすは新心理學の根本誤謬に過ぎずとして居る。(五)

前述のフォルトラーゲ及フヒテの努力を繼承しロッエの影響を受けて、更に熱心に無意識を研究せるものにウルリチがある。故に彼はフヒチ及後に述べんとするハルトマンとの移行をなすものと見ることが出來るが一方に哲學的思索に於てフヒヒ

テに及ばず、他方に生理的説明に於て充分ならざる所がある。彼によれば精神のあらゆる無意識的活動は内在的衝動より喚起され導來される。而して此意味に於ける衝動は識別力である。何となれば意識は識別力及其働より成るが故に、其等識別力及其働よりは直接何等の意識を有することが出來ぬ。即唯初めに無意識的無意的なる識別及豫想によりて、吾人は吾人を圍繞する外界の意識に達することが出來る。こは後のリップス、ブレンタノー等の動作と内容との別をなせる先驅と考ふることも出來る。彼は又モーズレー、レウェス等の如く、無意識心的現象の存在を證するため、視覺の例をとり來りて次の如く云つて居る。極小なる物體は之を知覺し得ずと雖も、而かも感官印象は之より出立しなければならぬ。何となれば大なる物體も弱くして認知すべからざる多數の感官印象の複合によりて見得らるべければである と。これはライブニッツの考と似て居るが、作用の總和は個々の要素と唯に數量上のみならず性質上に於て區別さるてふ原理を顧みざる考である。ウルリチは更に其無意識的感覺の假定を支持するため、原像に認められざりしものを殘像に於て見るとふ事實をあげ、ヘルムホルツも亦之を高調して居る。(六) 併し其際感覺の實際無意識たりしや否やを證することを得ず、注意作用の分解の結果は必ずしも此假定を支持

することが出來ぬであらうと思はれる。

凡

無意識の論はハルトマンに至りて最も精細を極めて居る。彼は無意識をば吾人の通例の意識下に隱れたる第二人格と思惟せるが、其構造及作用に於て通例の意識に比すべきものであるとした。此の如くして彼は先づ其無意識をライブニッツの極小知覺又はフェヒネルの無意識的感覺と區別し、是等の見解を拒斥して居る。彼は又意識と自我意識、意識と注意との區別を明かにし、ヘルバルトが無意識的狀態と自我意識的ならざる或は不注意の狀態とを混淆せるを難じて居る。かくて彼は更に意識が意識態(Bewusstheit)或は意識形式(Bewusstseinsform)として度を有すてふことに就き爭ひ、フォルトラーゲの考は更に茲に明瞭なるに至つたのである。卽意識的と無意識的との對立は程度の差違にあらずして互に矛盾せる對立である。其故に所謂低度の意識例へば動物界に存する如きものは、凡て亦此對立の一方の側卽意識の側に立つものである。彼に從へば無意識は三群に分れる。卽生理的無意識、相對的無意識及絕對的無意識是である。此中生理的無意識は神經系統の物質的中樞器官の靜

止分子的傾向を包括する。從つて劣等生物に於て、刺戟により一定の目的に對する有目的機制を起し、一定の運動を起し刺戟閾のほとりにて意識作用を解發する如き之に屬する。而して此の如きは絶對的無意識活動にも相對的無意識的活動にも屬せぬ。何となればそは全く何等心的のものでないからである。卽靜的記憶の痕跡は何等表象にあらずして、或表象の再顯を容易にする腦髓に於ける分子の活動に過ぎぬ。次に相對的無意識は生物の低度の個體意識には意識的たり、生物の最高の中心意識或は全意識に對しては閾下にあり卽無意識にある。其故に相對的無意識は生理的無意識に反對にして物的にあらず心的たりと雖も絶對的無意識に對しては心的活動にあらず受動的心的變化或は低度の意識に於ける心的現象たり、卽そは其自身意識的なれども中心意識に對して無意識であるのである。終りに固有の絶對的意識は、一方には其自身無意識にして他方には幾分心的でなければならぬ。卽第一理由よりして相對的無意識と異なり、第二理由よりして生理的無意識と異なつて居る。元來彼の哲學の主要なる所は、目的原理と機械原理との結合にある。絶對は無意識的に終局目的に向ひ進行しつゝあり、かの植物界又は無機界に於ても亦無意識は常に目的に向ひ進行し、而してそは本能に於て明かに現はれて居る。外界事物

の直觀も感覺の無意識的共働より成るのである。表象の聯合も無意識的に形成せられ、感情意志も無意識的作用により成り、從つて屢々不可解なることがある。然らば世界全體の目的は何であるか。それは絶對其者の無上の幸福であらう。されど此幸福は消極的のものに過ぎずして解脱(Erlösung)卽是である。此の如くなるを以てハルトマンの無意識はライブニッツ、ベネケ、ベルバルト、フェヒネル等と異なり寧ろシェリング、ヘーゲル、ショペンハウエルに近きものがある。彼は因果の連鎖中缺隙の存する場合には常に此假定を適用したのであるが、ゼームスは之を 'tumbling ground for whimsies' と呼び、ヘフディングも『吾人はガリレオが凡て全能の意志に訴へたるが如く、彼の無意識は凡のものを說明するが故に何者をも說明せずと云はんとす』と曰つて居る。(七)(八)

以上吾人は無意識なる概念の發達を通覽したるを以て、次に之に關する論爭の梗概を述べやうと思ふ。(未完)

註

(一) 嘗て同一題下に一小論文を雜誌『無盡燈』に掲載せることあれど其後諸書を涉獵し更に新しき考察をなせる點あるを以て玆に復びものすることとした。

(二) ハルトマンは之をカルスに歸したのであるが、彼によりて明瞭になりしものと云

ふべく、其起始は矢張ライプニッツとなすを穩當とする。

(三) 從來余は、idea 又は Vorstellung は共に觀念と譯して居るが近時は普通兩語共に表象の譯を用ゐる者が多い。今は用語の議論は略するが大體に於て idea を觀念と Vorstellung を表象と譯することゝした。

(四) Fechner: Elemente der Pychopysik, II, 15, 39 ff, 87.

〃 Zend-avesta, I, 282 ff.

(五) I.H. Fichte: Psychologie, I, 81ff, 152 ff, 16 ff, 216; II, 39.

(六) Ulrici: Leib und Seele; Grundzüge einer Psychologie des Menschen, 1866, 340, 370, 48.

(七) 直接引用し得さりしものは多くは左記に依る。

Hartmann: Moderne Psychologie.

(八) Höffding: Geschichte der Philosophie 1896, II, 599.